

子どもの装いについての親の悩み

— 内容と対応と現状についての質的調査とインタビューからみえてくるもの —

鈴木 公啓

Parents' concerns about their children's personal adornment

Tomohiro Suzuki

要 旨

子どもの装いについての親の悩みとその過程について、質的調査とインタビューにより検討をおこなった。研究1では、未就学児から中学生の娘がいる母親30名を対象に質的調査をおこない、親の有する子どもの装いについての悩み、それへの対応、そしてその結果について検討した。研究2では、3名の母親を対象にインタビュー調査をおこない、状況の詳細を把握するとともに、対応とその意図、そして結果として現在どのような状況になっているのか、それらの一連の過程について検討した。それらの結果、悩みの内容もプロセスも多様であることが示された。子どもの気質や以前の装いへの態度といった個人内要因だけでなく、友人関係などを含む環境要因が重要であることが伺えた。また、華美なおしゃれについては教育的対応が有用である可能性が示された。そして、当該の問題への対応とそこから生じる結果については、それまでの親子の関係性が重要であることが示唆された。

キーワード：装い、おしゃれ、子ども、教育、インタビュー

1. 問題および目的

子どもの装いについて、おしゃれの低年齢化という点で言及されることがある。従来は、子どもらしさの範囲の中で想定されたおしゃれが許容されていたのみであったが、近年のこどものおしゃれには、若者のおしゃれを相似的に取り込んでいるものが散見される。例えば、在塚・大川(2018)は、「子ども服の大人化」と述べ、大人と同様の被服を子どもが身につけるようになってきていることに言及している。このように、大人の装いが相似的に低年齢層においても採用されるようになってきており、子どもの装いが子どもらしくなく過剰とみなされる場合がある。

実際に、従来は子どもの装いとして想定されていなかった多種の装いの経験がある子どもが存在することも確認されている。鈴木(2018)は、日本全国に居住する3歳以上の未就学児、小学生、中学生、高校生の娘がいる母親を対象に調査をおこない、子どもの幅広い装いについての実態把握をおこなっている。そこでは、全体としては、年齢層が高くなるほど、頻度の多少はあるにしても様々な装いの経験割合が大きいことが確認されている。スキンケア、メイクアップ、ネイル、そしてアクセサリーについては、未就学児であっても3割から4割が、頻度はともかく経験していることが示されている。また、脱毛・除毛は、未就学児では経験者が2割を切っているが、年齢層が上がるにしたがっ

て経験頻度は増加し、高校生では最終的に経験者が6割を越えていることが示されている。そしてSuzuki (in press) では、体型変化という装い行動であるダイエット (鈴木、2020) も、未就学児で約2割が経験していることが示されている。

このように、低年齢層の子どもであっても様々な装いを経験しているという状況があるためか、子どものおしゃれ (華美な装い) の低年齢化が言及されることがある。メディアでも子どもの装いについて華美という観点から取り上げられることがある。そのため、一層、子どものおしゃれの低年齢化というテーマが人々の関心を集めることになるのだといえる。子どものおしゃれが低年齢層まで広がり、一方、子どものおしゃれは必ずしも許容されているわけではない (鈴木、2019) ということもあってか、子どものおしゃれのことで悩む保護者がいることも想定される。実際に、メディアでも、子どものおしゃれに悩む親、というストーリーが呈示されることがある。

しかし、子どもの装いに関する親の悩みや困っていること (以下、困り事) は、おしゃれについてだけなのであろうか。実際には、他の内容についての困り事が存在し、そちらの方が大多数である可能性もあるのではないだろうか。

本研究では、実際に親がどのような子どもの装いの困り事を経験し、そしてどのような対応をおこない、どのような結果へと至っているのか、さらに、そこに子どもの普段の様子や親子関係などがどのように関わっているのか、それらの実体やプロセスを明らかにすることを目的とする。そのために、まずは自由記述による調査をおこないその内容の整理と検討をおこなう。その上で、インタビューをおこない、その問題に関わるプロセスについてさらに検討を深めることとする。

なお、今回は、娘と母親の組み合わせについて扱うこととする。未就学児の時点で女兒は男児よりも装いに関心があることが知られており (e.g., 三浦・吉田、2008)、また、母娘の関係性の強さ (高木・柏木、2000) も指摘されている。そこで、ま

ずは装いへの関心の表出を捉えやすく、そして、そこに影響を与えると想定される母親との関係性を扱うこととした。

また、今回は、未就学児から中学生の特徴を検討する。若年層における装いの研究は少なく、未就学児における検討は極めて少ない。また、高校生であれば、比較的自由に装いをおこない (鈴木、2018)、そして大人の側もそれを許容する (鈴木、2019) ことが示されており、中学生までと高校生では装いの状況が異なってくると考えられる。そこで、未就学児から中学生までの年齢層を対象とすることにした。

2. 研究1

(1) 目的

自由記述による質的調査をおこない、親がどのような子どもの装いについての困り事を経験し、そしてどのような対応をおこない、どのような結果へと至っているのか、その実情について検討する。

(2) 方法

1) 対象および手続き

国内居住の¹⁾ 未就学児から中学生の娘がいる成人女性30名 (平均年齢38.9歳、標準偏差6.4、*Min.*=27、*Max.*=52) が調査に参加した。娘の現在の学年については後述のTable 1を参照のこと。クラウドソーシング会社 (株式会社クラウドワークス) にてリクルートをおこない、未就学児から中学生の娘がいること、子どもの装いで悩んだり困ったりした経験があることに該当する者への協力依頼をおこない、同意を得た者を対象に調査への回答を求めた。対象者へは謝礼を支払った。なお、本研究は著者の所属する大学の倫理に関する委員会にて承認を得ている (21-002)。

2) 調査内容

時期：娘のおしゃれについて悩んだり困ったりした時期 (学年) について回答を求めた。

内容：困り事の内容について自由記述で回答を求めた。

対応：困り事に対してどのような対応をおこなったかについて自由記述で回答を求めた。

現在の状況（現状）：現在、どのような状況になっているのかについて、自由記述で回答を求めた。

なお、対象者には、当該の困り事の内容、対応、現状について、それぞれに分けて記入欄を設定し、具体的に記述するように求めた。

(3) 結果

1) 自由記述の整理

内容、対応、現状については、著者が自由記述の内容を整理し分類をおこない分析に用いた。

内容については、特定の種類または同じ服を着たがる、親の準備した服を着ない、自分の気に入った髪型しかしない、服を何度も着替えるなどを「こだわり」、服にこだわらない、女の子らしい服装をしない、適当な格好で出かける、などを「無頓着」、そして、化粧やネイルをする/したがる、アクセサリをつける、髪を染めるなどを「華美」とした。いずれにもあてはまらないものを「その他」とした。

対応については、諦めたり、好きにさせるといったものを「諦観」、どちらかがある程度歩み寄る、妥協する、といったものを「折り合い」とした。ある程度理解したうえで認める、気長に待つといったことを「許容」、デメリットの説明をおこなう、説明の上でおしゃれしてよい場면을約束する、話合ったうえで許可をするといったものを「教育」、いずれにもあてはまらないものを「その他」とした。

現状については、問題がほぼ解消したものを「解決」、ある程度解決したり、解決していなくても受け入れるようになったものを「仮解決」、問題が継続しているものを「未解決」とした。いずれにもあてはまらないものを「その他」とした。

2) 各変数の関連について

現在の学年と困り事の生じた時期（以降、時期）についてまとめたものを Table 1 に示す。未就学児の時点で困ったことが生じていた者の割合は多い（14名、46.7%）傾向が認められた。

次に、時期と困り事の内容についてまとめたものを Table 2 に示す。全体としてはこだわりが 43.3%、華美が 33.3% であり、未就学児においては、こだわりが 71.4% と多く、学年が上がるに従って割合は小さくなっていった。一方、華美は学年が上がるに従って増えていき、小学校 4~6 年生と中学生では 6 割以上であった。

内容と対応についてまとめたものを Table 3 に示す。全体としては、教育と折り合いが 30.0% であり、内容ごとにみても、こだわりについては折り合いの割合が大きく（53.8%）、無頓着では諦観と許容の割合が大きく（それぞれ 40.0%）、華美については教育の割合が大きいことが確認された（60.0%）。

困り事の内容と現状についてまとめたものを Table 4 に示す。こだわりについては解決と未解決が同程度（41.7%）であり、無頓着は仮解決の方が多い（60.0%）結果であった。また、華美については、解決が多い（54.5%）結果であった。

困り事の対応と現状についてまとめたものを Table 5 に示す。許容については仮解決と未解決が多く（それぞれ 40.0%）、折り合いは全体的に同じくらいであった。教育は解決が最も多く（77.8%）、諦観は解決と未解決が同じ（それぞれ 50.0%）であった。

ここで、困り事の内容と対応と現状の組み合わせで最も多いものを確認したところ、華美と教育と解決の組み合わせであり、全体の 16.7% であった。

(4) 考察

研究 1 の結果より、決して華美だけではなく、無頓着であったり、固執したりといった悩みがあることが確認された。また、対応も多様であり、結果として解決していない場合があることも確認された。比較的に見られたプロセスとしては、華美な装いに対して教育的対応をおこない、それが解決したというものであり、華美なものに対しては教育が有用であることが示唆された。

Table 1 現在の学年と時期

		現在				合計
		未就学児	小学校 1～3年生	小学校 4～6年生	中学生	
時期	未就学児	9	5	0	0	14
	小学校1～3年生	0	4	1	0	5
	小学校4～6年生	0	0	3	2	5
	中学生	0	0	0	6	6
	合計	9	9	4	8	30

Table 2 時期と内容

		内容				合計
		こだわり	無頓着	華美	その他	
時期	未就学児	10 (71.4)	2 (14.3)	1 (7.1)	1 (7.1)	14 (100.0)
	小学校1～3年生	2 (40.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
	小学校4～6年生	1 (20.0)	1 (20.0)	3 (60.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
	中学生	0 (0.0)	1 (16.7)	4 (66.7)	1 (16.7)	6 (100.0)
	合計	13 (43.3)	5 (16.7)	10 (33.3)	2 (6.7)	30 (100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。

Table 3 内容と対応

		対応					合計
		許容	折り合い	教育	諦観	その他	
内容	こだわり	0 (0.0)	7 (53.8)	2 (15.4)	2 (15.4)	2 (15.4)	13 (100.0)
	無頓着	2 (40.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (40.0)	1 (20.0)	5 (100.0)
	華美	3 (30.0)	1 (10.0)	6 (60.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
	その他	0 (0.0)	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	合計	5 (16.7)	9 (30.0)	9 (30.0)	4 (13.3)	3 (10.0)	30 (100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。

Table 4 内容と結果

		結果				合計
		解決	仮解決	未解決	その他	
内容	こだわり	5 (38.5)	2 (15.4)	6 (46.2)	0 (0.0)	13 (100.0)
	無頓着	0 (0.0)	3 (60.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
	華美	6 (60.0)	2 (20.0)	2 (20.0)	0 (0.0)	10 (100.0)
	その他	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	2 (100.0)
	合計	12 (40.0)	7 (23.3)	10 (33.3)	1 (3.3)	30 (100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。

Table 5 対応と現状

		現状									
		解決		仮解決		未解決		その他		合計	
対応	許容	1	(20.0)	2	(40.0)	2	(40.0)	0	(0.0)	5	(100.0)
	折り合い	2	(22.2)	3	(33.3)	3	(33.3)	1	(11.1)	9	(100.0)
	教育	7	(77.8)	0	(0.0)	2	(22.2)	0	(0.0)	9	(100.0)
	諦観	2	(50.0)	2	(50.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	4	(100.0)
	その他	0	(0.0)	0	(0.0)	3	(100.0)	0	(0.0)	3	(100.0)
	合計	12	(40.0)	7	(23.3)	10	(33.3)	1	(3.3)	30	(100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。

3. 研究2

(1) 目的

インタビュー調査をおこない、親が子どもの装いで困っている状況の詳細を把握するとともに、どのような対応がどのような意図でなされて現状に至るのかに主に焦点をあてて明らかにすることを目的とする。基本的には、研究1で扱った内容に加え、普段の子どもの様子や子どもの以前の装いの様子、普段の養育態度や関係性、親の装いに対する考えなどについて、半構造化面接を実施することにより、それらの内容を検討することとする。

(2) 方法

1) 対象

研究1の対象のうち、インタビューへの協力の意思があり、同意を得た3名を対象とした。なお、研究1の結果を参考に、比較的顕著であった華美と教育と解決の組み合わせにおいて、その詳細プロセスなどが同質であるのか、2名を対比して検討することとした。また、無頓着と仮解決という組み合わせについて、華美のパターンと比較検討することを目的とし、この組み合わせである1名を対象とした。それぞれのケースの情報については Table

Table 6 各ケースの情報

ケース	母親年齢	娘学年(年齢)	悩みの時期	内容	対応	現状
ケースA	42	中学校1年生(13歳)	小学6年生	華美	教育	解決
ケースB	34	小学校3年生(8歳)	保育園年長	華美	教育	解決
ケースC	48	中学校1年生(12歳)	小学5年生	無頓着	諦観	仮解決

6に示す。なお、娘の人数はすべてのケースで1人であった。

2) 手続き

Zoomのチャット機能を使用し、テキストのやりとりによるインタビューをおこなった²⁾。インタビュー開始前に改めてインフォームドコンセントを得て、同意を確認したうえでインタビューを開始した。インタビューの時間は50~60分程度であった。なお、対象者へはインタビュー終了後に謝礼を支払った。なお、本研究は著者の所属する大学の倫理に関する委員会にて承認を得ている。

(3) 結果および考察

以下、いくつかのカテゴリーに分けて検討をおこなっていく³⁾。これらのカテゴリーは、基本的には先述のようにインタビュー前に予定していた内容に準じたものである。なお、引用番号の冒頭のアルファベットはケースを示す(例:「A1」は1つ目の引用、かつ、ケースAの発言であることを意味する)。

1) 子どもの特徴と以前の装いへの態度

まず、子どもの特徴と以前の装いへの態度を整理することにより、装いの悩みの内容との繋がりを検討する。

子ども自身の特徴としては、以下のような記述が得られた⁴⁾。

引用A1「とても活発な子です。何にでも興味があります。中学生になったばかりで勉強と部活に張りきっています。自分の意見をはっきり言う子です」
引用B2「繊細なところが前からありましたが反抗

期もありさらに繊細さが目立つようになってきました。明るく元気な子供らしい面もありますが外で張り切ったぶん家では自由気ままで感情的なところがあります。いわゆる優等生になりたいという気持ちが強いようで学級リーダーや授業中の発言、掃除など張り切っているようです。」

引用 C3 「活発でやんちゃな感じです。」

また、以前の装いへの態度としては、以下のような記述が得られた。

引用 A4 「幼少の頃はほとんど無頓着でした。」

引用 B5 「おしゃれは小さい頃から興味があり、色使いや模様などに口うるさく自分で服を選んだり、このコーディネートは変だよな? などと聞いてきたりなんてこともよくありました」

引用 C6 「そもそも、服に頓着しなかったタイプだと思います。」

これらのことから、本人の気質と悩みの種類が必ずしも直結しておらず、また、悩む以前の装いの様子も、悩みの内容と直結しているとは限らないことが確認された。活発であるからといって華美なおしゃれをおこなうわけではなく、また、以前に無頓着だからといってそれで悩むようなことになったりするわけではないこと、華美で悩む場合は必ずしも以前からその傾向が伺えるわけではないことが示唆された。

2) 問題への過程

それぞれのケースにおいて、きっかけの記述が得られた。

引用 A7 「クラス替えがあってお友達が変わりました。そのお友達と遊ぶようになってメイクをして帰って来て、こっそりお風呂場で洗っていました。その頃から服装や髪形にも気を使うようになりました。」

引用 A8 「保育園は裸足生活なので足に塗ってきた子が嬉しそうに話してきて、自分もやってみたい、ほしいという気持ちになったようです。」

引用 A9 「手足にピンクのマニキュアなどを塗ってきたようです。」

ケース A については、お友達の影響によりおしゃ

れに関心を持ち華美なおしゃれをおこなうようになったことが確認できる。同時に、親が問題を認識した出来事も明確である。ケース B も同様に、友達の影響が確認出来る。ただ、ケース B においては、もともとおしゃれに興味があったのが、より顕在化したものといえる。

引用 C10 「年長になってスポーツしはじめてからかまわなくなりました。」

ケース C については、スポーツをきっかけに無頓着になったことが記述により確認できる。

これらのことから、いずれのケースでも、ある程度のきっかけが存在することが示唆される。特に、華美の場合は行為の性質上、きっかけが明確なようである。ただし、他のケース、そして今回扱っていない固執の場合にも同様か否かは、今後の検討が必要であろう。

3) 問題への認識や対応とその後

ケース A から順番に検討をおこなう。

引用 A11 「メイクしてきたことはすぐにわかりました。お風呂にこっそり洗いに行ったのも気づきましたが、あえてその時は呼び止めませんでした。洗い終わってきた時に、どうしたのと声を掛けました。」

ケース A については、きっかけが明確ということもあり、親が問題を認識した後の対応の記述もその出来事に應對したものとなっている。

また、そのことに対する母親の認識としては、以下のとおりである。

引用 A11 「びっくりはしませんでした。女の子ならいずれそういうこともあるかなと。大人になったのだなと少し嬉しく感じました。ただ心配だったのは隠れてしている事です」

このように、華美なおしゃれに対する理解が伺える。そして、問題なのはあくまでも隠れてすることと考えている。隠れてすることの問題として以下のような記述もある。

引用 A12 「隠れてすると言うことは、メイク道具が欲しくても言えなくて悪い事をしたり、お友達に迷惑をかけるのでは無いかと心配でした。」

引用 A13 「女の子ですし、いずれするのであれば興味を持った時にしっかり教えた方が良いと感じました。でも実際は怒らずにメイク落としの方法について教えたので。そうなんだ。と安心している様子でした。」

先の記述もあわせると、ただ急に叱ったり問い詰めたりするのではなく、理解と許容のうえで、向き合っていることが確認出来る。それが娘に伝わっていることも読み取れる。

その後の様子は以下のとおりである。

引用 A14 「娘は納得していました。それから時々してきてはしっかりした方法で洗い流しています。今は服装や髪形に興味がある様です。メイクについては本人の中でひと段落した様です。」

引用 A15 「今は部活、勉強も忙しくなり、その合間でお洒落を楽しんでいる様子です。」

このように、その後としては、隠れておしゃれをするようなことはなく、安定した形でおしゃれを楽しんでいる状況が示されている。

次に、ケース B についてである。

引用 B16 「おもちゃやさんなどでも子供用が売っているのでその事を持ち出して欲しがられましたが、私は身体が出来上がっていないうちはそういうものは反対だと伝えました。(成分的に) あとはやはり大人になって自己責任を取れるようになってからというのをなんとか子供向けに説明しました。」

身体に生じうる問題について、伝える努力をしたことが確認出来る。その結果は以下である。

引用 B17 「最初は腑に落ちない感じでしたが、大人の爪と子供の爪はこんなに違うんだよと見て触らせて説明して納得してもらえました。あなたの爪は何もしなくてもこんなにつやつやじゃないと褒めたら喜んでくれました。」

引用 B18 「話が通じやすい面もあったのでスムーズに理解してもらえました。」

このように、子どもは納得し、問題は解決したことが確認出来る。

ケース C については、独特の事象が確認出来る。

引用 C19 「短パンにスポーツシャツで短髪なので、

まず男の子に間違えられるところからスタートします。」

引用 20 「初対面の人から男の子に間違えられたら、また騙せた? みたいなゲーム感覚なんですか。」

無頓着だけでなく、その容姿を利用した遊びのようなものがおこなわれている。

引用 C21 「ハラハラしますけど流れに任せています。」

そしてそれに対して、一種の諦めのようなものが読み取れる。一方、以下のような記述も得られている。

引用 C22 「髪型にはこだわりがあるようです」

引用 C23 「スポーツシャツも、彼女なりのこだわりはあるようです。」

引用 C24 「最近、先輩に教えてもらって日焼け止めを塗り始めました。」

引用 C25 「この頃ムダ毛を気にし始めたので、その日(おしゃれに興味を持って話をしたり一緒に買い物に行ったりする日)⁴⁾も近いかと感じます。」

このように、完全に外見を気にしないわけではないことや、おしゃれへの芽生えが伺えることから、諦めている部分はあるとはいえ、最近ではある程度安心して見守っている部分もあると考えられる。

ケース C は、外見にまったく無頓着というよりも、所謂女の子らしいおしゃれをしないという点で、親が心配をしているケースと捉えることも可能である。

4) 親の全般的な養育の態度と対応との関連

ここでは、装いに限らない親の娘への養育態度を取りあげ、それと装いの問題への対応との関連について検討する。

ケース A において、以下のような記述が確認されている。

引用 A26 「一度怒ってしまうと、その内容についてはもう二度と話題に出来ない気がしました。メイクに限らず常にその様に思っています。」

引用 A27 「自分が子供の頃は親にあまり相談できなかったのですが、自分は同じ目線で物事を見てあげ

たいと思っています。』

このように、装いに限らず、いきなり叱ったりせずに、子どもと同じ目線で応じようとしていることが確認出来る。

そして、普段の養育態度の反映が示唆されるような以下の記述も得られている。

引用 A29 「(今は) 髪形に興味をもってきており、ヘアアイロンが欲しい様子です。」

引用 A29 「勉強や部活に必要な無い物、本当に必要な衣類以外は自分のおこずかいで購入するように話しているので自分で購入すると思います。自分の可能な金額で購入できるものを調べている様です。」

これらから、普段のお金の使い方などの養育態度に則り、おしゃれについても対応していることが示唆される。つまり、おしゃれにだけ特別な対応をするのではなく、普段の親子の関係性やしつけなどが、おしゃれにも適用されている。このことは、問題が生じたときに急にそのことだけに場当たりに対応するのではなく、普段からの信頼に基づく言動での対応が重要であることが示唆される。

ケース B における記述は以下である。

引用 B30 「わかりやすい言葉や例をあげれば、お互い意見交換していく中で納得してくれるという感じ。最近では反抗期のためかなり時間はかかっていますが、時間をおいて娘の方から「さっきの話だけど…」などと切り出してきて理解してくれる、という流れです。」

ケース A と同様、親子の普段の関係性が重要であることが示唆される記述がある。

なお、装いに限定した対応の背景に養育全般の考えがあることが、以下の記述からも確認出来る。

引用 B31 「中学生くらいになると話しても聞かぬぞうではありますが、肌云々という話より自己責任や自律の方について話していきたいです。」

特定の行動だけではなく、親から子へ伝える軸となるものがあり、その軸があるうえで、装いについても対応していくということが読み取れるといえよう。さらに以下のような記述も得られている。

引用 B32 「私の娘なので、だめ！ の一点張りでは多分隠れてするだろうなという予想だからです。けれど身だしなみを気にする気持ちは理解できるので一緒に考えていきたいなと思います。」

自分の娘の性格を理解した上で、また、発達段階を理解した上で、どのように対応していくかを考えていることが確認出来る。

これらの記述には、力尽くで否定するような態度はみられず、理解・共感という態度が確認出来る。後述（引用 A36-39）のように、装いに対する肯定的態度も存在する。つまり、手放しでの肯定では無く、普段の親子関係も考慮した自分なりの考えに基づいた対応を考えていることが読み取れる。

ケース C においては、以下のような記述が得られている。

引用 C33 「子供の過度なおしゃれには反対です。」

引用 「子ども時代にはその時にしかできないことをしてほしい、それはおしゃれじゃないとおもいます。」

親としての養育についての考え方を確認出来る。それは、それぞれの発達段階において取り組むことができる固有の体験を十分におこなって欲しいという考えが基本にあり、あくまでも低年齢でのおしゃれはそれに該当しない、という考えである。あくまでも年齢層の問題だけであり、おしゃれそのものの否定ではない。後述（引用 C41-43）のように、ある程度成長してからは、むしろ、おしゃれを楽しむことに賛成の立場でもある。つまり、自分なりの考えに基づいた、子どもの今の年齢における対応方針が根底にあり、それが、その時点での子どもの装いにおける対応に反映されているといえよう。

5) 装いに対する態度

最後に、装いやおしゃれについての考えについてまとめる。

ケース A は以下のとおりである。

引用 A34 「自分に自信をもって行動できる、ワクワクできるきっかけになると思います。」

引用 A35 「子供は色々試して欲しいですね」

引用 A36 「そうですね。女の子ですし、いつもきれいにしていて欲しいです。初めの印象はやはり服装や髪形で見られると思うので。その様なことで損はしてほしくないと思います。」

このように、見た目の重要性、そしてその楽しさを理解したうえで、子どものおしゃれに向き合っていることがうかがえる。頭ごなしに対応するのではなく、受容が先にあることから、ケース A における困った事象が解決したものと想定される。

ケース B では、以下の様な記述が得られている。
引用 B37 「化粧の度合いにもよりますが、小学生のうちは絶対に反対のつもりです。私もませっ子だったので気持ちはわかりますがきれいな肌のうちにやる必要はないよねということ、娘は敏感肌なのでそのことを伝えたいと思います。」

引用 B38 「今は中高生でもバンバンメイクする時代なので禁止しすぎても大変そうだなという気持ちです。」

子どもの化粧などを手放しで推奨するわけではないが、成長にともない認めるという態度である。

ケース C においては以下のとおりである。

引用 C39 「なるべくしたいおしゃれをして欲しいとおもっています。」

引用 C40 「好きな色、形など、自分で考えて表現してほしいです。」

引用 C41 「お金の範囲内で、派手でも理解できないものでもすきにさせたいですね。」

引用 C42 「(それなりの年齢になったら) 相応のものなら OK します。」

おしゃれに対する肯定的な態度が確認出来る。これまでの無頓着という状況があるからか、自由に好きにおしゃれを楽しんで欲しいという考えがあることが読み取れる。また、ケース C の母親は、自身のおしゃれについて、若い頃は熱心であることを記述している。そして、息子(対象である娘の兄)のおしゃれの無頓着さについて、養育の反省が伺える記述が得られている。この、当人の以前のおしゃれへの関心や、息子のケースでの反省が、娘のおしゃれへの許容的態度に繋がっていると考え

られる。

4. 総合考察

以上、子どもの装いの悩みとその過程について、質的調査とインタビューにより検討をおこなった。必ずしも華美なおしゃれの悩みが多いわけではないこと、また、そのプロセスは多様であることが示唆された。これまで、子どもの装いに関する問題としては、華美な装いが言及されることはあっても、こだわりや無頓着については言及されることは基本的には無かった。なお、発達障害の分野においてこだわりが言及されることがあっても、それは、多様なこだわりの中に装いがあるという扱いであり、装いの諸問題の枠組みで検討したものではない。装いを枠組みとして検討した場合に、様々な問題が生じていることが確かに確認されうるが、センセーショナルな内容だけでなく、実際にどのようなことが生じているかを丁寧に扱っていくことにより、現実的に生じている様々な子どもの装いに関する問題の理解、そして、適切な対応方法の模索が進展するものと考えられる。また、プロセスの多様性からは、きっかけがあれば、その子の気質や以前の装いへの態度と直結するわけではない悩みが生じることが確認されたといえる。個人内要因からの困り事やその後の予測は難しいこと、また、友人関係などを含む環境要因が重要であることが示唆される。そして、華美な装いについては教育的対応が有用である可能性が示唆された。さらに他のケースも含め、それまでの親子の関係性が重要であることも示唆された。子どもに関する他の問題(e.g., スマートフォンやゲームの使用)と同様に、装いにおいても、問題への対応において普段の親子関係が重要であることが再確認できたといえる。今後、子どもの装いの問題のプロセスと介入方法の検討を進める際には、親子の関係性が一つのキーになる可能性がある。

以下、本研究の限界である。今回の質的調査においては、人数の少なさという問題もあり、得られた知見の再現性については検討の余地がある。ま

た、分類の妥当性についても、検討は不十分であることは否めない。客観的指標を用いた分類の確認なども含め、分類の妥当性について確認する必要がある。そして、インタビューにおいては、その内容の一般化についてはもちろん難しいものであることに留意する必要がある。

なお、本研究のテーマではないために特に詳細に扱いはしなかったが、今回も装い起因障害（装いによって生じる身体のトラブル）が確認されている。具体的には、肌のトラブルなどがあったケースが3件（華美において30%）確認されている。子どもの装い起因障害の経験割合が決して低いこと（鈴木、2018）がこれまで報告されているが、今回のデータはそれを上回るものであった。装い起因障害の問題は看過できないものといえるため、このことについては改めて対応を検討していく必要がある。

5. 引用文献

- 在塚美季・大川知子 (2018). 市場環境の変化にみる「子供服の大人化」に関する検討 実践女子大学生生活科学部紀要, 55, 17-25.
- 三浦友里・吉田紘子 (2009). 幼児服の選択に影響する環境要因 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), 58, 71-85.
- 鈴木公啓 (2018). 子どものおしゃれの低年齢化 — 未就学児から高校生におけるおしゃれの実態 — 慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション, 50, 53-69.
- 鈴木公啓 (2019). 大人における子どものおしゃれに対する態度 社会と調査, 23, 52-65.
- 鈴木公啓 (2020). 装いの心理学 — 整え飾るころと行動 北大路書房
- Suzuki, T. (in press). Mothers' Influence on the Body Dissatisfaction and Weight Loss Behaviors of their Preschool- to Junior-High-School-Level Daughters: The Case of Japan. Japanese Psychological Research. <https://doi.org/10.1111/jpr.12381>
- 高木紀子・柏木恵子 (2000). 母親と娘の関係 — 夫との関係を中心に 発達研究, 15, 79-94.

注

- 1) 対象者の居住地については変数としては特に扱わなかった。しかし、インタビューの内容から、必ずしも居住が首都圏に限定されているわけではないことは確認出来ている。
- 2) インタビューイーがログインする際にアカウント作成が不要であり URL にアクセスするのみで参加可能であることから、Zoom Meetings を使用することとした。なお、音声と映像を用いなかった理由としては、インタビューへの参加ハードルを下げることで、対象者の負担を減らすことを念頭においたからである。
- 3) 誤字脱字等はそのままだしている。
- 4) 括弧とその中の文言は著者による補足。

(すずき ともひろ) 東京未来大学